

表紙 の 説明

大坂城 (秀吉の城を埋め尽くした徳川の巨大な城)について



大坂城の全貌を捉えた画像のうち、上段のものは航空レーザ(ALS50)で取得した点群データに、航空写真撮影(ADS40)で取得した画像のRGB色情報を付加した三次元の色付き点群データです。下段左の画像は、ADS40の3ラインセンサの特徴を生かし、直下向きのカラー画像を用いて地物の倒れの少ないトゥルーオルソです。2000年に(株)パスコが世界で初めてADS40を導入し、その後、測量分野で利用されています。下段右の画像は熱赤外線センサ(TABI)で観測した夜間の放射温度画像です。赤色系が高温部、青色系が低温部を表しています。

■表紙画像のご提供先

「大坂城」

—(株)パスコ

〒153-0043 東京都目黒区東山1-1-2 東山ビル

http://www.pasco.co.jp Tel : 0120-494-800

〈カスタマーセンター〉

使用機器：航空レーザ計測(ALS50 LeicaGeosystems社製)

航空写真撮影(ADS40 LeicaGeosystems社製)

熱赤外線観測(TABI ITRES社製)

明治以前は「大阪」ではなく「大坂」と書かれていますので、ここでも「大坂城」という語を用います。

大坂城は上町台地の北端に位置し、この地にはかつて本願寺八世蓮如が坊舎を営み、一向一揆の総本山として石山本願寺が君臨していました(図-1)。堅塁で囲まれた寺内町が発展し、時の権力者織田信長にも屈せず、11年間にわたり石山合戦を繰り広げました。朝廷による仲介で本願寺が紀伊鷺森(和歌山市)に退き、その際の不審火で石山本願寺の壮大な伽藍は灰燼に帰しました。

織田信長は大坂城築城構想を持っていましたが、天正10(1582)年に本能寺の変で敢え無く途絶え、その後に、豊臣秀吉が天正11(1583)年から天下の巨城として大坂城を築城しました。

豊臣時代の大坂城は、本丸・二の丸・三の丸、それらの郭(くるわ)の間には内堀を設け、さらに水堀と空堀による外周を設けた総構えの巨城でした(図-2)。秀吉死去後の慶長19(1614)年の大坂冬の陣、さらには慶長20(1615)年の大坂夏の陣によって全城焼失し、豊臣家も滅亡しました。

徳川の世になると、一時徳川家康の孫松平忠明が城主となり、その後は幕府直轄領として城代による支配が幕末まで続きました。

元和6(1620)年から徳川幕府の天下普請として大坂城の再築が開始され、寛永6(1629)年に再築は

全て終了しました。この徳川期大坂城は、豊臣期大坂城を地下に埋め、その上に盛土を施した大工事で、石垣を含めて全て新たに構築し、豊臣期のものは一切使用しない徹底ぶりでした。天下普請に動員された西国・北陸の諸大名47家の労苦は想像を絶するものでした。

徳川期大坂城の最大の特徴は、完成度の高い石垣構築技術を用いたことにあります。そのため豊臣期の石垣に比べ、石垣高は倍近く、内堀・外堀も堀幅を広げ、深さも倍近いものとなりました(図-3)。また、城内には畳14畳敷以上の巨石が10個以上も配されました。そして、完成した徳川期大坂城には、豊臣期の天守より約20m高い白亜の大天守(豊臣期は漆黒の天守)が聳え、城内には三重櫓12基、二重櫓15基を配する壮大な城郭となりました。しかし、寛文5(1665)年に落雷によって天守は焼失しました。

昭和6(1931)年に大阪市民の寄付金によって外観は豊臣期の大坂城天守を模した鉄筋コンクリート造りの天守が完成しました(図-4、大阪城天守閣と呼称しています)。したがって、私たちは徳川期大坂城の城域の上に、外観を真似た豊臣期大坂城の天守が聳えるという歴史的には不思議な光景を見ていることになります。(瀬戸島政博)



図-1
石山本願寺の石碑
(筆者撮影)

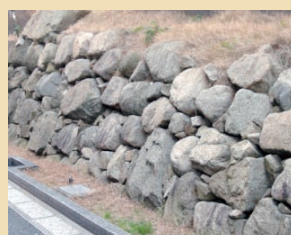


図-2
豊臣期大坂城の石垣
(筆者撮影)



図-3 屏風折れした石垣が連続する南外堀(筆者撮影)



図-4 豊臣期天守に外観を模倣した昭和の天守(筆者撮影)